HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	看護学生の臨地実習適応に関連する個人内要因と求めるソーシャルサポート
著者	竹之内，優美；Takenouchi，Yumi
引用	北海学園大学大学院経営学研究科　研究論集(20)：1-14
発行日	2022-03

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

看護学生の臨地実習適応に関連する個人内要因と求めるソーシャルサポート

竹之内　優　美

要　旨

本研究は，臨地実習適応と個人内要因との関連を構造化すること，および看護学生が臨地実習に躓いた際に求めるソーシャルサポートを明らかにすることを目的とする。全国の看護系大学１－４年生1280名に質問紙調査を実施し，回収率は27.9%であり，うち回答に不備のない348名を分析対象とした。その結果，適応群・再適応群は不適応群よりも「特性的自己効力感尺度」・「特性自尊感情尺度」・「状態自尊感情尺度」・「社会に対する適応感尺度」・「看護学生用ストレス・コーピング尺度」の積極的コーピングの得点および看護師志望度が高く，「UPI」の得点が低く，目標とする看護師がいる者が多い傾向にあった。また，学生が求めるソーシャルサポートとして，指導者に対しては優しく具体的なアドバイスを，教員に対しては学生に対する理解や共感を求めていると推察され，臨地実習適応の促進を図るうえでの心理的サポートの重要性が示唆された。

序　論

少子超高齢多死社会を迎える我が国では，保健医療体制の改革の推進によって地域包括ケア時代へと移行している。「新たな医療の在り方を踏まえた医師・看護師等の働き方ビジョン検討会報告書」（厚生労働省, 2017）では，そのビジョンとして，１点目に医療従事者が，その意欲と能力を存分に発揮できるよう，「多様な生き方・働き方の選択」と「研鑽し続けるプロフェッショナリズムの追求」とを両立できること，２点目に全国一律の制度で方向付けるのではなく，個々の医療従事者や医療機関が，状況に応じて主体的な選択や取組みを行うことができる支援と環境整備が行われること，この２つの「目指す姿」が示されている。

このような社会背景を踏まえ，看護職には対象の多様性・複雑性に対応した看護を想像する能力が求められている。それに伴い，将来を担う看護職員を養成するための看護基礎教育においても見直しの機運が高まり，2022年４月には第５次カリキュラム改正の施行が決定されている。今回の改正カリキュラムのポイントとして，臨床判断能力や対象の療養の場の多様化への対応能力の強化に対する教育内容の充実などが挙げられる。これらのことから，看護実践能力や社会人基礎力を育むうえで，臨地実習の重要性がさらに高まっている。しかしながら，医療系学生にとって臨地実習が大きな学びとなると同時にストレッサーとなることも指摘されている（藤澤・畠山・氏家・高橋・松浦, 2017）。したがって，看護学生において学校生活への適応を考えるうえで，臨地実習の体験は重要な要素であるといえる。

一般的に，適応（adaptation; adjustment）とは，「生物が環境に合うように自らの身体や行動を変容させること，またはその状態」である（中島他編, 1999）。出野（2007）によれば，「良好な適応状態とは，その社会の生活様式やルールを取り入れ，役割を果たすといった柔軟性と，その環境の中で環境を自分に合うように修正・改革し，どのように自己実現していくかという積極的・能動的なあり方の双方が重要である」と考えられている。一方，不適応（maladjustment）とは，「生体が自然的環境，社会的環境あるいは自分自身の精神内界に対して，適合する行動を十分にとれず，本人または社会にとってなんらかの不利益を招いている状態」（中島, 1999）と定義される。不適応を引き起こす要因には個体の適応能力や生活環境の過大なストレス因子などが挙げられる。このように，適応とは非常に幅広い概念であることから，その判断には内的／社会的側面および主観的／客観的側面などの多角的側面を同時に考慮する必要がある（出野, 2007）。

では，臨地実習における適応・不適応とは，具体的にどのような状態を指すのであろうか。まず，臨地実習適応については，学生自身の主観的側面である「実習適応感」として定義されている文献が散見する。吉永・近森・大沢（1990）によれば，実習適応感とは，「実習での危機を乗り越え，実習に対する自分なりの意味や課題が明確になり，主体的積極的に実習に取り組んでいる状態」とされる。大久保・青柳（2003）の実習適応感の定義では，「看護学生が実習環境と適応していると意識すること」である。高橋・柴田・鹿村（2006）の場合は，「実習への

積極的かつ主体的な目標達成行動や意識」と定義づけている。これらの定義から，臨地実習適応とは，「臨地実習の環境からの影響に上手く対応しながら，心理的にも前向きな状態で臨地実習に意味を見出し，主体的かつ積極的に目標達成に向けて行動している状態」といえるであろう。一方，臨地実習不適応に関する定義を明確にしている文献は見当たらない。一般的な不適応の定義から考えると，臨地実習不適応とは，「場の状況や出会う人々など，臨地実習の環境に合わせた行動を十分にとることができず，実習内容の遂行に困難さを生じさせるような心理状態を呈し，さらにそのことによって，看護学生として求められる役割を果たせずに本人や周囲の人々になんらかの不利益を招いた状態」といえるであろう。この結果，学生は臨地実習をリタイヤする，実習目標を達成できないなど，科目単位が習得できない場合もある。臨地実習は，看護基礎教育カリキュラムの中核であり，学生にとって難易度の高い専門科目であるが，各教育機関は，学生が 1000 時間を超える臨地実習を乗り越えて卒業できるように教育・支援を行う必要がある。

看護学生の臨地実習に関連する先行研究は多く，臨地実習におけるストレス・自己効力感・適応感など，様々な視点からの研究蓄積がある。まず，看護学生の臨地実習おけるストレスに関する研究については，2000 年頃よりストレス要因とコーピングに着目された報告がなされている（溝口他, 1997；土屋, 2001；毛利・真鍋, 2008；藤澤・氏家・畠山・高橋・松浦, 2018）。近年では，こうした臨地実習に関連する様々なストレス要因がカテゴライズされたものもある。質的研究として，加島・樋口（2005）による研究では，看護学生の臨地実習におけるストレッサーとして「看護能力不足」・「患者の家族との関係性」・「実習先指導者・本学教員との関係性」・「グループ学生との関係性」の 4 カテゴリーが抽出されている。中島・粕谷（2018）の研究においても，「看護過程展開の困難感」・「自己の看護技術への苛立ち」・「看護介入に対する困難」・「緩やかな経過による単調さ」・「教員・指導者への戸惑いと苛立ち」・「グループ内の関係性への不満」の 6 カテゴリーが抽出されている。さらに小笠原（2017）による 10 文献を用いた研究では，臨地実習における困難やストレスに感じたと思われる事象を分類し，「看護実践」・「事前学習」・「記録」・「患者との関係」・「指導者との関係」・「教員との関係」・「学生同士の関係」・「カンファレンス」の 8 カテゴリーが抽出されている。次に量的研究として，金子・樅野（2015）の研究では，臨地実習におけるストレス構造を明らかにしており，因子分析によって「看護過程の展開」・「知識・技術」・「日々の実習計画」・「患者・家族・医療従事者との関係」・「教員指導者との関係」・「学生同士の関係」・「カンファレンス」の 7 因子が抽出されている。中本他（2015）の研究では，臨地実習における学生の困難感について因子分析がなされ，「看護過程の展開」・「カンファレンスの運営と討議」・「患者との関わり」・「指導者との関わり」・「看護援助の実施」の 5 因子が抽出されている。これらの先行研究から，看護学生の臨地実習では，看護実践能力や様々な人間関係などに関す多様なストレス要因が存在し，不適応を引き起こしやすい状況に置かれることが明らかである。

次に，看護学生の臨地実習における自己効力感に焦点が当てられた先行研究として，片倉・高橋（2014）による自己効力感を高める要因に関する質的研究が挙げられる。この研究は，Bandura（1995）による自己効力感に影響を与える 4 つの情報源と実習全体を通して学生の自己効力感に影響をもたらした体験を明らかにすることを目的としたものである。学生の語りの内容の分析結果から，自己効力感を高める情報源として「遂行行動の達成」では「ケアの充実感」が，「言語的説得」では「学生の成長を促す言葉」が，「代理的経験」では「看護職意識の高まり」が，「情動的状態」では「実習を継続する気持ち」が抽出されている。そして，実習での学びの深まりを実感して個別性のあるケアを理解し，さらに学生自身が成長を自覚して，看護職としてチーム医療を意識し，目指したい看護師像を重ねることが自己効力感を高める要因になっていることが示唆されている。一方，真鍋他（2007）の研究では，看護学生の「臨地実習自己効力感尺度」の開発が試みられている。この尺度は「対処の理解・援助効力感」・「友人との関係性の維持効力感」・「指導者との関係性の維持・学習姿勢効力感」の 3 因子構造であり，臨地実習の課題特異的な自己効力感を測定する尺度である。また，この調査では，実習前よりも実習中・実習後の「対処の理解・援助効力感」および「指導者との関係性の維持・学習姿勢効力感」因子得点が上昇していることが明らかにされている。しかし，真鍋他（2007）の「臨地実習自己効力感尺度」の開発に当たっては，基準関連妥当性の検証がなされていない。またこの二つの研究は，臨地実習の適応状態や他の心理特性との関連性は明らかされていない。

上記以外に，臨地実習適応感を取り扱ったものとして，吉永・大沢・高橋（1989）の研究では，自我同一性と実習適応感との関連について検証されている。その結果，彼女らが独自に作成した「実習適応感尺度」と「自我同一性尺度」（水野, 1982）の間には有意な正の相関があり，実習適応感は自我や社会性の確立との関連が高いことが明らかにされている。また，高橋・柴田・鹿村（2006a）の研究では，実習適応感の構成概念として，「肯定的自己評価」・「実習の困惑体験」・「周囲のサポート」・「看護職に対する満足感」・「ルール・規則」の 5 領域を想定して「実習適応感尺度」を開発した結果，「取り組み姿勢」・「自己評価」・「学習準備状況」・「基本的信頼感」の 4 因子が

抽出されている。この研究では，実習適応感と社会的スキルとの正の相関や職業未決定（看護職になることに対する態度）との負の相関が示されている。さらに，高橋他（2006b）は，その後の研究で社会的スキルおよび職業未決定に関する各尺度の下位因子が「実習適応感尺度」の下位因子に与える影響について検証している。その結果，社会的スキルの「感情処理スキル」を獲得している者ほど実習適応感の「自己評価」が高く，加えて職業未決定尺度の「混乱」が強いものほど実習適応感の「自己評価」が低く，職業未決定尺度の「猶予」が強いものほど実習適応感の「基本的信頼感」が低い傾向が認められている。これらのことから，実習適応にはコーピングや看護職を目指すことへの動機づけが関連していると考えられる。さらに，龔（2020）の看護学生の実習適応感に影響を与える要因に関する質的研究では，その要因として「学生が考える将来の目標と実習に対する意味づけ」・「学生が実感した実習のリアリティ」・「学生が求める人的資源」の3カテゴリーが抽出されている。しかしながら，この研究は学生の語りから帰納的に要素を抽出しているため，学生の様々な特性と実習適応との関連については検証がなされていない。

このように，看護基礎教育における臨地実習に関連する研究を概観すると，臨地実習ストレッサーについては多くの研究がなされ，ストレス要因の構造化も試みられている。しかし，個人内の様々な特性と臨地実習適応との関連については断片的で，その構造化に課題がある。以上より，本研究では，臨地実習に影響を及ぼす個人内要因に焦点を当て，それらの構造化を試みることを目的としたい。さらに，臨地実習で躓いたときに学生が周囲の支援者に何を求めているのかを具体的に知ることによって，学生のニーズに適したサポートの示唆を得ることができ，臨地実習適応の促進に繋がると考えられる。

Ⅰ．研究目的

本研究における第一の目的は，臨地実習適応と個人内要因との関連を検証し，それらを構造化することである。さらに，第二の目的は，看護学生が臨地実習に躓いた際に求めるソーシャルサポートを明らかにすることである。これらの成果は，臨地実習における効果的な適応支援のあり方を見出すうえでの基礎資料になりうると考える。

Ⅱ．研究方法

1．研究デザイン

無記名式質問紙を用いた調査研究である。

2．調査対象

全国の看護系大学1－4年生1280名に調査を依頼した。回答のあった357名（回収率27.9%）のうち，各尺度の回答に記載不備のない348名を分析対象とした。

3．調査期間

質問紙調査は，2018年1月－2018年6月を回収期間として実施した。

4．データ収集方法

1）調査方法

事前に同意が得られた看護系大学の学部長ないし学科長に質問紙を送付し，対象学生への配布を依頼した。回答後の質問紙は，個人が特定されないよう，添付した返信用の封筒に対象者自身が封入し，個別に投函する方法によって回収した。

2）調査内容

⑴　基本属性

年齢・性別・学年・臨地実習の経験の有無について，選択法で回答を求めた。

⑵　看護に対する目標志向性

看護師に対する志望度（5件法）および目標とする看護師の有無について，選択法で回答を求めた。

⑶　過去の臨地実習に関する内容

臨地実習における辛い経験の有無，その辛い経験に対する主観的乗り越え度（「乗り越えた」から「乗り越えていない」の4件法）について，選択法で回答を求めた。

⑷　適応に関連する心理測定尺度

社会に対する適応感尺度　社会的適応状態の主観的指標として，樋口（2007）の社会に対する適応感尺度（5項目）を用いた。この尺度は，大学生活に対する適応感との強い相関が示されている。「非常によく当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。

University Personality Inventory（以下，UPI）　心理的適応状態の主観的指標として，UPI（全国大学保健管理協会, 1966）を用いた。この尺度は，不健康尺度56項目と健康尺度4項目の全60項目で構成されている。なお，健康尺度は検証尺度でもある。UPIは，大学生の神経症や心身症などの精神的健康に問題のある学生の早期発見に役立つとされている。今回の調査では，対象者の負担軽減のため，健康尺度4項目を除き，さらに56項目の不健康尺度の中から20項目を抜粋した。この中には精神的健康問題を検出するための4つのkey項目も含まれる。教示文については一部変更し，○×の2件法で回答を求めた。

特性的自己効力感尺度　成田他（1995）の特性的自己効力感尺度（23項目）は，Sherer & Maddux（1982）による既存の尺度の邦訳版であり，性格特性的な自己効力

感の測定指標である。「そう思う」から「そう思わない」の 5 件法で回答を求めた。

特性自尊感情尺度　阿部・今野（2007）の特性自尊感情尺度（10 項目）は，Rosenberg（1965）の邦訳版である自尊感情尺度（山本他, 1982）の教示文を変更したものである。「当てはまる」から「当てはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

状態自尊感情尺度　阿部・今野（2007）の状態自尊感情尺度は，自尊感情尺度（山本他, 1982）10 項目のうち 9 項目を用い，さらに項目の表現を一部改変して作成されており，教示文も変更されたものである。「当てはまる」から「当てはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

看護学生用ストレス・コーピング尺度　竹内（1996）が開発した本尺度（24 項目）は，「積極的コーピング」・「回避的コーピング」・「情緒調整的コーピング」の 3 因子構造となっている。「よくもちいた」から「もちいなかった」の 4 件法で回答を求めた。

⑸　求める支援

今後の臨地実習で辛い状況に直面した際に，指導者・教員・家族・実習メンバー・友人のそれぞれの人々から「どのような支援を受けたいか」について自由記述で回答を求めた。

5．データ分析方法

1）臨地実習適応と個人内要因との関連の検証

まず，記述統計量の算出および各尺度間の相関分析を行った。次に，臨地実習の辛い経験に関する回答をもとに 3 群に分け，各尺度平均値を用いた一要因分散分析および目標看護師の有無の度数分布を用いたカイ二乗検定を行うことにより，過去の臨地実習適応と個人内要因との関連を検証した。データの解析には SPSS（Ver. 27）を用いた。

2）臨地実習適応と個人内要因との関連の構造化

臨地実習適応と各個人内要因を用いて共分散構造分析を行った。データの解析には Amos（Ver. 27）を用いた。

3）臨地実習の中で躓いたときに求めるソーシャルサポート

自由記述によるテキストデータをテキストマイニングにより分析を行った。データの解析には KHcoder 3（樋口, 2014）を用いた。

Ⅲ．倫理的配慮

本研究は，北海学園大学大学院経営学研究科「倫理審査委員会」の承認を得て実施した（承認番号：BA-17-2）。研究対象者には，本研究への参加は自由意思であること・不参加の場合も不利益を被ることはないこと・研究への参加により期待される利益や起こりうる危険と対処方法・プライバシーの保護のほか，研究成果は学会発表または論文投稿により公表される場合があることについても書面をもって説明した。

Ⅳ．結　　果

1．分析対象と属性

分析対象とした看護系大学生 348 名の平均年齢は 19.9 歳（SD±1.5）であった。対象者の属性は表 1 に示した通りである（Table 1）。

2．臨地実習経験の状況

分析対象者 348 名の中で臨地実習を 1 度でも経験したことがある者は 260 名（58.8%）であり，その中で臨地実習において辛い経験のある者は 135 名（51.9%）であった。さらに，辛い経験を有する対象者 131 名から主観的乗り越え度の回答を得た。その結果，辛い経験を「乗り越えた」と回答した者が 35 名（26.7%），「かなり乗り越えた」と回答した者が 55 名（42.0%），「あまり乗り越えていない」と回答した者が 35 名（26.7%），「乗り越えていない」と回答した者が 6 名（4.6%）であった。

以下，臨地実習の経験を有する者の中で辛い経験が無い者を「適応群」とし，辛い経験を有する者のうち「乗り越えた」・「かなり乗り越えた」と回答した者を「再適応群」，「あまり乗り越えていない」・「乗り越えていない」と回答した者を「不適応群」とする。

Table 1　対象者の基本属性

属性	度数	%
設置主体		
公立	1	11.1%
私立	8	88.9%
性別		
男性	38	10.9%
女性	309	88.8%
不明	1	0.3%
年齢		
18 歳	73	20.2%
19 歳	73	20.2%
20 歳	121	33.4%
21 歳	49	13.5%
22 歳	20	5.5%
23 歳以上	11	3.7%
不明	1	0.3%
学年		
1 年生	32	9.2%
2 年生	149	42.9%
3 年生	71	20.5%
4 年生	95	38.5%
不明	1	0.3%

Table 2　各心理尺度総得点間の相関と平均値・標準偏差（n＝348）

	1	2	3	4	5	*M*	*SD*
1　特性的自己効力感						69.95	12.45
2　特性自尊感情	.58**					29.85	7.46
3　状態自尊感情	.54**	.83**				28.39	7.50
4　看護学生用ストレス・コーピング	.17**	.11*	.13*			58.55	10.57
5　社会に対する適応感	.50**	.49**	.52**	.10		17.55	4.20
6　UPI	−.45**	−.46**	−.47**	−.10	−.40**	7.23	5.26

*$p<.05$,　**$p<.01$

Table 3　看護学生用ストレス・コーピング尺度因子と各心理尺度の相関（n＝348）

	特性的自己効力感	特性自尊感情	状態自尊感情	社会に対する適応感	UPI	*M*	*SD*
看護学生用ストレス・コーピング						58.55	10.57
積極的コーピング	.34**	.16*	.19**	.25**	−.15**	21.40	5.01
情緒調整的コーピング	.10	.10	.11*	.06	−.07	22.75	6.06
回避的コーピング	−.16**	−.08	−.07	−.18**	.04	14.40	3.43

*$p<.05$,　**$p<.01$

Table 4　臨地実習の辛い経験の有無と目標看護師の有無との関連（n＝258）

目標看護師	臨地実習の辛い経験の有無				*p* 値
	無（*n*＝124）		有（*n*＝134）		
	度数	割合	度数	割合	
有	40	32.26%	56	41.79%	.11
無	84	67.74%	78	58.21%	.11

Table 5　臨地実習の辛い経験への適応と目標看護師の有無との関連（n＝129）

目標看護師	臨地実習の辛い経験への適応				*p* 値
	再適応群（*n*＝89）		不適応群（*n*＝40）		
	度数	割合	度数	割合	
有	44	49.44%	10	25.00%	**.01**
無	45	50.56%	30	75.00%	**.01**

3．各尺度の相関分析

6尺度間のPearsonの積率相関係数を算出した結果より，特性的自己効力感尺度・特性自尊感情尺度・状態自尊感情尺度・社会に対する適応感尺度・UPIの5尺度間には，中程度の有意な相関が認められた。中でも特性自尊感情尺度と状態自尊感情尺度は強い相関を示した。一方，看護学生用ストレス・コーピング尺度については他の尺度とほぼ無相関であった（Table 2）。ただし，看護学生用ストレス・コーピング尺度の下位因子と他の尺度との相関分析では，「積極的コーピング」因子のみ「特性的自己効力感尺度」と「社会に対する適応感尺度」との弱い相関が認められたが，「情緒調整的コーピング」・「回避的コーピング」の2因子についてはほぼ無相関であった（Table 3）。

4．実習の辛い経験と目標看護師

分析対象348名のうち，343名より目標看護師の有無についての回答が得られた。その結果，目標とする看護師がいる者は134名（39.06%）であり，目標とする看護師がいない者は209名（60.09%）であった。また，臨地実習の経験を有する者については，回答が得られた258名のうち，目標とする看護師がいる者は134名（51.93%）であり，目標とする看護師がいない者は124名（48.06%）であった。

次に，過去の臨地実習において辛い経験「有群」と「無群」の2群における目標看護師の有無の度数分布を用いてカイ二乗検定（$\chi^2=2.51$, $df=1$, n.s.）を行ったが，2群に有意差は認められなかった（Table 4）。一方，臨地実習の辛い経験を有する「再適応群」と「不適応群」の2群についても同様にカイ二乗検定（$\chi^2=6.77$, df＝1, p＜.01）を行ったところ，2群間に有意差が認められ，「不適応群」よりも「再適応群」のほうが「目標とする看護師」を有する者が多い傾向にあった（Table 5）。

5．実習の辛い経験と看護師志望度

分析対象348名のうち，343名より看護師志望度についての回答が得られ，その度数分布は次のとおりである。まず，「非常に思う」と回答した者が113名（31.21%），「かなり思う」と回答した者が121名（33.43%），「どちらともいえない」と回答した者が63名（17.40%），「あまり思わない」と回答した者が37名（10.22%），「全く思わない」と回答した者が9名（2.49%）であった。また，臨地実習の経験を有する者260名については258名から回答が得られ，「非常に思う」と回答した者が69名

Table 6　臨地実習経験と看護師志望度の平均値の差異（N＝253）

	適応群 N＝123	再適応群 N＝89	不適応群 N＝41	＞有意差（p 値）
看護師志望度	3.90（0.98）	3.65（0.98）	3.39（1.15）	適応群＞不適応群（p＜.05）

（SD）

Table 7　臨地実習の辛い経験による各尺度平均値の差異（N＝255）

	臨地実習の実習の辛い経験			＞有意差（p 値）
	無 （適応群） N＝124	乗り越えた （再適応群） N＝90	乗り越えていない （不適応群） N＝41	
特性的自己効力感	72.41（11.35）	68.20（10.44）	63.61（15.30）	適応群＞再適応群（p＜.01） 適応群＞不適応群（p＜.05）
特性自尊感情	30.85（ 6.92）	30.60（ 6.89）	25.85（ 6.78）	適応＞不適応（p＜.01） 再適応＞不適応（p＜.05）
状態自尊感情	29.05（ 7.06）	29.41（ 6.81）	24.22（ 6.79）	適応＞不適応（p＜.01） 再適応＞不適応（p＜.05）
ストレス・コーピング	59.22（ 8.90）	58.90（10.87）	56.54（ 9.91）	n. s
積極的	22.08（ 4.20）	22.40（ 4.68）	19.95（ 5.41）	適応＞不適応（p＜.05） 再適応＞不適応（p＜.05）
情緒調整的	22.94（ 5.56）	22.58（ 6.93）	21.41（ 5.55）	n. s
回避的	14.19（ 2.80）	13.92（ 3.45）	15.17（ 3.19）	n. s
社会に対する適応感	17.99（ 3.96）	17.62（ 4.08）	14.83（ 3.82）	適応＞不適応（p＜.01） 再適応＞不適応（p＜.01）
UPI	6.40（ 4.43）	7.41（ 5.12）	8.61（ 4.59）	不適応群＞適応群（p＜.05）

（SD）

（26.74％），「かなり思う」と回答した者が 97 名（37.60％），「どちらともいえない」と回答した者が 51 名（19.77％），「あまり思わない」と回答した者が 34 名（13.18％），「全く思わない」と回答した者が 7 名（2.71％）であった。

次に，臨地実習経験を有する 260 名のうち，看護師志望度および実習の辛い経験の有無・辛い経験の主観的乗り越え度に関する回答に不備のない 253 名を分析対象とし，「適応群」・「再適応群」・「不適応」の 3 群における看護師志望度の平均値を用いて一要因分散分析を行った。その結果（$F(2)=3.87, p<.05$）より，「適応群」＞「不適応群」（$p<.05$）で有意差が認められた。

6．実習の辛い経験と各尺度間の平均値

臨地実習経験のある 260 名のうち，実習の辛い経験の有無・辛い経験の主観的乗り越え度に記載不備のない 255 名を分析対象とし，「適応群」・「再適応群」・「不適応」の 3 群における特性的自己効力感尺度・特性自尊感情尺度・状態自尊感情尺度・看護学生用ストレス・コーピング尺度・社会に対する適応感尺度・UPI の各尺度平均値を用いて多変量分散分析を行った。その結果（$F(496.00)=3.25, p<.001$）から，看護学生用ストレス・コーピング尺度を除いた 5 尺度の平均値は群間に有意差が認められた。

また，看護学生用ストレス・コーピング尺度の下位因子の平均値を用いて同様に多変量分散分析を行った。その結果（$F(502.00)=2.29, p<.005$）から，「積極的コーピング」因子のみに群間の平均値に有意差が認められた。

7．共分散構造分析

臨地実習の経験を有する 260 名から得られた「目標看護師の有無」・「看護師志望度」および 6 種の心理測定尺度の回答を観測変数とし，「臨地実習適応」を概念変数として，それらの関連について，共分散構造分析を行った。その際，調査時の主観的適応感として用いた「社会に対する適応感」と「UPI」の 2 尺度の得点が高いほど適応感が高くなるよう評価基準を一貫するために，「UPI」の得点を逆転処理して用いた。これらの個人内要因と「臨地実習適応」との構造モデルは Figure 1 に示した通りである。

まず，「看護師志望度」・「特性的自己効力感」は「臨地実習適応」に影響を及ぼし，自尊感情については「特性自尊感情」が「状態自尊感情」を介して「臨地実習適応」に影響を及ぼしていた。一方，「目標看護師の有無」と「ストレス・コーピング」による「臨地実習適応」への影響は低かった。さらに，「臨地実習適応」が調査時点での主観的適応状態の指標である「社会に対する適応感」や「UPI（逆転）」に影響を及ぼしていた。このモデル適合度は CMIN＝.003，GFI＝.968，AGFI＝.918，CFI＝.973，RMSEA＝.073 となった（Figure 1.）。

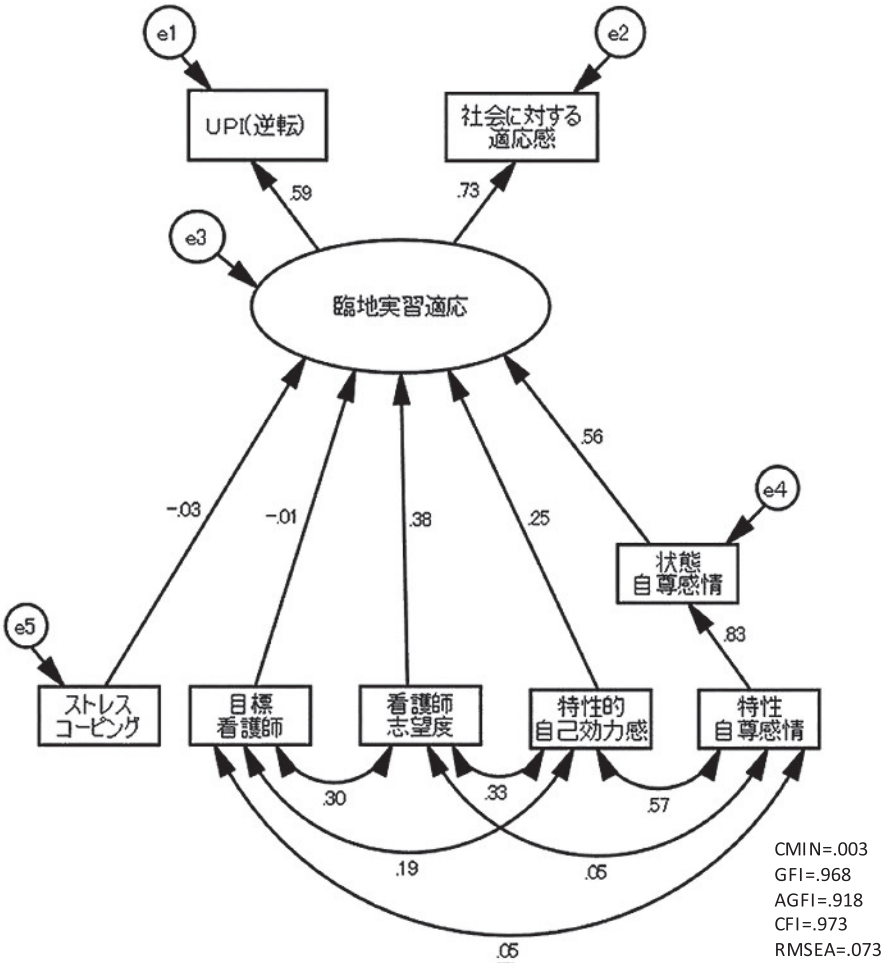

Figure 1. 共分散構造分析

8．今後の臨地実習で躓いた時に求めるソーシャルサポート

臨地実習を一度でも経験したことがある 260 名に対し，「臨地実習の中で躓いた時に，周囲からどのような支援をしてほしいか」について指導者・教員・家族・実習メンバー・友人のそれぞれに対する要望を自由記述で回答を得た。それらのうち，一部でも記載のある 221 名の回答を分析対象とし，最大 197 名，最小 171 名のテキストデータを用い，テキストマイニングにより頻出語（動詞・名詞・サ変名詞・形容詞・形容動詞）を抽出した。

また，同じ用語であっても，ひらがなと漢字で記載されている場合があり，それを統一するためにテキストデータを一部修正した。その他に，支援内容として上手く抽出されない語について，一部強制抽出語を設定した（品詞：タグ）。

1）指導者に求める内容

指導者に関しては，まず，対象者全体として，「アドバイス」・「教える」・「指導」などの行動を指す回答が多く，これらに関連した言葉として，「優しい」・「ヒント」・「具体的」・「解決」といった言葉が抽出された。適応群についても同様の傾向であった。指導者に対しては，優しく，具体的にわかるよう，解決に導けるようなアドバイス・指導を求めていた。また，臨地実習の辛い経験を有する再適応群・不適応群の比較では，再適応群には「考える」という語が上位に抽出されたが，不適応群には「具体的」が上位に抽出された（Table 8）。

2）教員に求める内容

教員に対しては，対象者全体として，「アドバイス」・「教える」といった言葉が上位であることは指導者と共通していた。一方，「聞く」・「一緒に」・「話」・「自分」などが抽出されたことは教員に特徴的であった。また，適応群では「解決」という語が抽出され，再適応群はほぼ全体と同様の傾向であった。不適応群においては，「指導」や「分かる」が上位になっていた。「分かる」に関する記述は「分かるように・分からないところを」教えてほしい，「分かって」ほしいといった内容であった（Table 9）。

3）家族に求める内容

家族に対しては，対象者全体として，圧倒的に「聞く」・「話」が多かった。また，「ご飯」・「励ます」・「いつも通

Table 8　躓いたときに受けたい支援内容（指導者）　n＝181

	全体				適応群（n＝99）				再適応群（n＝55）				不適応群（n＝27）			
	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合
1	アドバイス	サ変名詞	53	29.28%	アドバイス	サ変名詞	36	36.36%	アドバイス	サ変名詞	13	23.64%	指導	サ変名詞	6	22.22%
2	教える	動詞	23	12.71%	教える	動詞	16	16.16%	考える	動詞	7	12.73%	アドバイス	サ変名詞	3	11.11%
3	優しい	形容詞	18	9.94%	指導	サ変名詞	7	7.07%	優しい	形容詞	7	12.73%	記載	サ変名詞	3	11.11%
4	指導	サ変名詞	17	9.39%	優しい	形容詞	7	7.07%	教える	動詞	5	9.09%	具体的	タグ	3	11.11%
5	ヒント	名詞	11	6.08%	解決	サ変名詞	6	6.06%	ヒント	名詞	4	7.27%	思う	動詞	3	11.11%
6	考える	動詞	11	6.08%	ヒント	名詞	5	5.05%	解決	サ変名詞	4	7.27%	優しい	形容詞	3	11.11%
7	解決	サ変名詞	10	5.52%	具体的	タグ	5	5.05%	指導	サ変名詞	4	7.27%	ヒント	名詞	2	7.41%
8	具体的	タグ	9	4.97%	言う	動詞	5	5.05%	助言	サ変名詞	3	5.45%	患者	名詞	2	7.41%
9	言う	動詞	9	4.97%	自分	名詞	5	5.05%	相談	サ変名詞	3	5.45%	教える	動詞	2	7.41%
10	助言	サ変名詞	9	4.97%	助言	サ変名詞	5	5.05%	分かる	動詞	3	5.45%	言う	動詞	2	7.41%

Table 9　躓いたときに受けたい支援内容（教員）　n＝197

	全体				適応群（n＝106）				再適応群（n＝62）				不適応群（n＝29）			
	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合
1	アドバイス	サ変名詞	55	27.92%	アドバイス	サ変名詞	31	29.25%	アドバイス	サ変名詞	18	29.03%	アドバイス	サ変名詞	5	17.24%
2	教える	動詞	27	13.71%	教える	動詞	17	16.04%	聞く	動詞	9	14.52%	指導	サ変名詞	5	17.24%
3	聞く	動詞	25	12.69%	一緒	サ変名詞	11	10.38%	考える	動詞	8	12.90%	分かる	動詞	4	13.79%
4	考える	動詞	20	10.15%	聞く	動詞	11	10.38%	教える	動詞	7	11.29%	聞く	動詞	4	13.79%
5	一緒	サ変名詞	19	9.64%	考える	動詞	10	9.43%	話	サ変名詞	7	11.29%	教える	動詞	3	10.34%
6	話	サ変名詞	19	9.64%	話	サ変名詞	9	8.49%	一緒	サ変名詞	6	9.68%	思う	動詞	3	10.34%
7	指導	サ変名詞	17	8.63%	解決	サ変名詞	7	6.60%	指導	サ変名詞	5	8.06%	自分	名詞	3	10.34%
8	自分	名詞	13	6.60%	指導	サ変名詞	7	6.60%	自分	名詞	5	8.06%	話	サ変名詞	3	10.34%
9	分かる	動詞	12	6.09%	分かる	動詞	6	5.66%	相談	サ変名詞	5	8.06%	ダメ	形容動詞	2	6.90%
10	相談	サ変名詞	11	5.58%	サポート	サ変名詞	5	4.72%	悪い	形容詞	3	4.84%	ヒント	名詞	2	6.90%

Table 10　躓いたときに受けたい支援内容（家族）　n＝179

	全体				適応群（n＝102）				再適応群（n＝55）				不適応群（n＝22）			
	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合
1	聞く	動詞	66	36.87%	聞く	動詞	34	33.33%	聞く	動詞	22	40.00%	聞く	動詞	9	40.91%
2	話	サ変名詞	59	32.96%	話	サ変名詞	33	32.35%	話	サ変名詞	16	29.09%	話	サ変名詞	9	40.91%
3	ご飯	名詞	16	8.94%	ご飯	名詞	11	10.78%	励ます	動詞	5	9.09%	見守る	動詞	3	13.64%
4	励ます	動詞	13	7.26%	相談	サ変名詞	8	7.84%	いつも通り	タグ	4	7.27%	ご飯	名詞	2	9.09%
5	いつも通り	タグ	10	5.59%	作る	動詞	7	6.86%	見守る	動詞	4	7.27%	意見	サ変名詞	2	9.09%
6	見守る	動詞	10	5.59%	励ます	動詞	7	6.86%	言う	動詞	4	7.27%	言葉	名詞	2	9.09%
7	作る	動詞	9	5.03%	いつも通り	タグ	6	5.88%	ご飯	名詞	3	5.45%	実習	サ変名詞	2	9.09%
8	相談	サ変名詞	9	5.03%	そっとして	タグ	4	3.92%	愚痴	名詞	3	5.45%	食料	名詞	2	9.09%
9	そっとして	タグ	6	3.35%	応援	サ変名詞	4	3.92%	黙る	動詞	3	5.45%	送る	動詞	2	9.09%
10	言う	動詞	6	3.35%	何もしない	タグ	4	3.92%	そっとして	タグ	2	3.64%	アドバイス	サ変名詞	1	4.55%

Table 11　躓いたときに受けたい支援内容（実習メンバー）　n＝184

	全体				適応群（n＝99）				再適応群（n＝61）				不適応群（n＝24）			
	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合
1	話	サ変名詞	28	15.22%	話	サ変名詞	16	16.16%	励ます	動詞	11	18.03%	メンバー	名詞	3	12.50%
2	一緒	サ変名詞	27	14.67%	一緒	サ変名詞	15	15.15%	聞く	動詞	10	16.39%	一緒	サ変名詞	3	12.50%
3	聞く	動詞	27	14.67%	聞く	動詞	14	14.14%	一緒	サ変名詞	9	14.75%	考える	動詞	3	12.50%
4	共有	サ変名詞	23	12.50%	共有	サ変名詞	13	13.13%	話	サ変名詞	9	14.75%	聞く	動詞	3	12.50%
5	励ます	動詞	21	11.41%	考える	動詞	9	9.09%	共有	サ変名詞	7	11.48%	話	サ変名詞	3	12.50%
6	考える	動詞	17	9.24%	協力	サ変名詞	8	8.08%	協力	サ変名詞	6	9.84%	悪口	名詞	2	8.33%
7	協力	サ変名詞	15	8.15%	相談	サ変名詞	8	8.08%	考える	動詞	5	8.20%	解決	サ変名詞	2	8.33%
8	相談	サ変名詞	12	6.52%	励ます	動詞	8	8.08%	自分	名詞	5	8.20%	共有	サ変名詞	2	8.33%
9	解決	サ変名詞	10	5.43%	解決	サ変名詞	7	7.07%	アドバイス	サ変名詞	4	6.56%	言う	動詞	2	8.33%
10	お互い	名詞	9	4.89%	お互い	名詞	5	5.05%	頑張る	動詞	3	4.92%	合える	動詞	2	8.33%

Table 12　躓いたときに受けたい支援内容（友人）　n＝171

	全体				適応群（n＝93）				再適応群（n＝55）				不適応群（n＝23）			
	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合	抽出語	品詞	出現回数	割合
1	聞く	動詞	77	45.03%	聞く	動詞	44	47.31%	話	サ変名詞	26	47.27%	聞く	動詞	10	43.48%
2	話	サ変名詞	75	43.86%	話	サ変名詞	40	43.01%	聞く	動詞	22	40.00%	話	サ変名詞	8	34.78%
3	一緒	サ変名詞	14	8.19%	一緒	サ変名詞	7	7.53%	一緒	サ変名詞	6	10.91%	愚痴	名詞	3	13.04%
4	愚痴	名詞	10	5.85%	行く	動詞	4	4.30%	愚痴	名詞	4	7.27%	いつも通り	タグ	2	8.70%
5	相談	サ変名詞	8	4.68%	相談	サ変名詞	4	4.30%	実習	サ変名詞	4	7.27%	記載	サ変名詞	2	8.70%
6	励ます	動詞	8	4.68%	遊び	名詞	4	4.30%	励ます	動詞	4	7.27%	自分	名詞	2	8.70%
7	行く	動詞	6	3.51%	応援	サ変名詞	3	3.23%	行く	動詞	2	3.64%	相談	サ変名詞	2	8.70%
8	遊び	名詞	6	3.51%	愚痴	名詞	3	3.23%	自分	名詞	2	3.64%	ダメ	形容動詞	1	4.35%
9	実習	サ変名詞	5	2.92%	悩み	名詞	3	3.23%	終わる	動詞	2	3.64%	ポジティブ	形容動詞	1	4.35%
10	遊ぶ	動詞	5	2.92%	遊ぶ	動詞	3	3.23%	乗る	動詞	2	3.64%	一緒	サ変名詞	1	4.35%

り」・「見守る」・「そっとして」などの言葉も抽出された。適応群については「応援」・「何もしない」などが抽出され，再適応群については「愚痴」・「黙る」などが抽出された。不適応群においては，「励ます」が抽出されず，「聞く」・「話」が4割以上であった（Table 10）。

4）実習メンバーに求める内容

実習メンバーに対しては，「聞く」・「励ます」・「お互い」・「共有」・協力」などの言葉が挙げられていた。また，不適応群では，「メンバー」・「悪口」などが挙がっており，人間関係を挙げていたのは不適応群の3名のみであった（Table 11）。

5）友人に求める内容

友人に関しては，「聞く」・「話」が多かった。適応群・再適応群・不適応群もこの2つの語が上位を占めた。また，友人に関しては「遊ぶ・遊び」も抽出された（Table 12）。

V．考　　察

1．臨地実習適応に影響を及ぼす個人内要因

本研究の第一の目的として，臨地実習適応と個人内要因との関連を検証し，それらを構造化することを挙げた。まず，今回の調査結果から，過去の臨地実習適応の状態が良好である者のほうが「特性的自己効力感尺度」・「特性自尊感情尺度」・「状態自尊感情尺度」・「社会に対する適応感尺度」・「看護学生用ストレス・コーピング尺度」の積極的コーピングの得点が高く，精神的健康の問題を検出する「UPI」の得点が低いという結果が得られ，加えて看護師志望度も高く，目標とする看護師がいる者が多い傾向にあった。以下，これらの個人内要因と臨地実習適応との関係について考察を述べる。

1）臨地実習適応と心理的特性との関係

自己効力感　自己効力感（Self-efficacy）とは，ある行動を起こす前にその個人が感じる遂行可能感であり，自己効力感が強いほど実際にその行動を遂行できる傾向にあるとされている（Bandura, 1977；坂野, 2002）。この自己効力感には，課題特異的な自己効力感（SSE）と一般化された自己効力感（GSE）とがあり，今回の調査で用いた「特性的自己効力感尺度」は，後者を測定する尺度である。江本（2002）によれば，GSEはある特定の行動に対する自己効力感が場面や状況・行動を超えて般化し，より一般的な側面の個人の行動傾向に影響を及ぼすという自己効力感であり，ある種の人格特性的な認知傾向とみなされたものである。また，GSEは，未経験の新しい状況においても適応的に処理できるという“期待”に影響を与えるとされる（Shereer et al., 1982；江本, 2000）。西村・野村・丸野（2012）は，自己効力感が精神的健康（情緒）に及ぼす効果を明らかにしており，自己効力感が心理的な適応の予測指標となり得ることが示されている。今回の調査で用いたSherer（1982）による「特性的自己効力感尺度」の原尺度は，「行動を起こす意志」・「行動を完了しようと努力する意志」・「逆境における忍耐」などから構成されている（成田他, 1995）。これらの要素を臨地実習場面に置き換えると，臨地実習において求められる行動の遂行可能感や困難な出来事に直面している渦中でストレス耐性を高め，実習目標や己の目標に向かって困難に立ち向かう意志を持つことであろう。したがって，自己効力感は臨地実習適応を促進する個人内要因の1つであるといえる。

自尊感情　自尊感情とは，自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚，感情であり（James, 1892），心理的健康を維持するための基盤をなす要素である。自尊感情が高いことは適応的あるいは社会的に望ましい行動と関連する（中間, 2016）。さらに，自尊感情には変動性があり，この変動性の高さが不適応的な心理的特徴と関連している。Terdal & Downs（1995）は，自尊感情を一定した要素と変動性のある要素の2つの側面から捉えている。1つ目に「状態自尊感情（state of self-esteem）」である。これは，ある時点における自分に対する評価的感情であり，状況の推移によって変動するものである。2つ目に「特性自尊感情（trait of self-esteem）」である。これは，時間や状況を超えた自分に対する評価的感情であり，比較的安定したものである（北村, 2011）。

これに基づき，今回の調査でも阿部・今野（2007）による「特性自尊感情尺度」と「状態自尊感情尺度」を用いたところ，両尺度ともに過去の臨地実習適応の状態が良好である者のほうが高値を示した。自尊感情には，「自己評価・自己受容」・「関係性の中での自己」・「自己主張・自己決定」の3要素があるといわれており，Rosenberg（1965）による自尊感情尺度は「自己評価・自己受容」である。阿部・今野（2007）の2種の自尊感情尺度もRosenberg（1965）の邦訳版である自尊感情尺度（山本他, 1982）を基礎としたものである。この2つの尺度は非常に高い相関を示したことから，もともとの特性自尊感情の高さが臨地実習における体験に伴う肯定的・否定的な自己評価に影響し，それによって臨地実習適応への影響を及ぼすと考えられる。

ストレス・コーピング　ストレス・コーピングとは，ストレスに対する認知評価とストレス状況の低減のための対処行動に関する概念である。このコーピングの内容には多様性があることから，必ずしも問題を解決し，望ましい適応へ向かうものではない（石井, 2009）。

今回の調査結果から，看護学生用ストレス・コーピングは，他の心理測定尺度と比べると臨地実習の辛い経験や乗り越えた経験との関連性が低く，看護学生のコーピングスタイルには大差がなかった。ただし，下位因子を

比較すると「積極的コーピング」因子のみ，過去の臨地実習適応が良好な者のほうが高い傾向にあり，積極的コーピングと臨地実習適応との関連が示された。看護学生用ストレス・コーピング尺度の「情動調整的コーピング」と「回避的コーピング」は Lazarus らの情動焦点型コーピングに,「積極的コーピング」は問題焦点型コーピングに相応している（竹内, 1996）。一般的に自己効力感が高い者はコーピングの積極的対処を多く用い，ストレス事態におかれても諦めない傾向にあり，全般的にストレス反応の表出が少ないと言われており，臨地実習自己効力感尺度の得点が高い学生はコーピングスキルを多く使うことも明らかにされている（毛利, 2008）。これらのことから，困難に立ち向かい，解決に向けて積極的に行動するコーピングスタイルが実習適応を促進するといえる。

心理的・社会的適応状態　適応状態の評価には，精神的・社会的側面および主観的・客観的側面がある。今回の質問紙調査では，対象者ひとり一人の他者評価を行うことが困難であったため，調査時点での主観的適応感に焦点を当て，その測定指標として「社会に対する適応感」と「UPI」を用いた。その結果から，過去の臨地実習適応の状態が良好である者のほうが現在の社会的適応状態が高く，精神的健康度も高いという結果が得られた。看護を学ぶ学生たちにとって，臨地実習における失敗体験は看護職になることの困難さを実感するものであろう。臨地実習が肯定的な経験か否定的な経験かによって，その後の社会的･心理的適応に影響を及ぼすと考えられる。

２）臨地実習適応と目標との関係

まず，臨地実習適応と目標看護師の有無との関係について述べる。今回の結果から，目標とする看護師がいるほうが臨地実習において辛い状況に直面した際に再適応を果たせる者が多いという結果が得られた。このようにロールモデルとなる看護師がいることは，自己の課題が明確になる一方で，臨床の場において看護師としてどのようにふるまうべきかを具体的に理解し，行動化につながると考えられる。そのことが自己の目標を具体化すると共に自己効力感を高め, 問題解決に導くことによって, 臨地実習適応の促進につながると考えられる。

次に, 臨地実習と看護志望度との関係について述べる。今回の結果から，看護師志望度が高いほうが臨地実習適応は良好であるという結果が得られた。柴田他（2006）はこうした看護師志望度と実習適応との関係について検討している。それによると，実習適応感尺度（高橋他, 2006）と職業未決定尺度（下山, 1986）との間には負の相関（r = − .60）があることが明らかにされており，今回の結果とは共通性がある。看護系大学は看護学を学ぶことを目的とする大学であるため，看護師という職業決定に対する迷いがないことは，学業への動機づけと困難を乗り越えたいという意志を高め，大学生活への適応を促進する重要な要素となる。さらに，実習適応感を考えるうえで，学生個々が実習にどのような意味付けをしているのかが重要であると言われている（龔, 2020）。今回の結果からも，学生自身が看護を学ぶことに対する明確な目的・目標を持っていることによって臨地実習に意味を見出し，困難に直面した時にも問題解決に向けて前向きな思考・積極性・粘り強さを引き出すことができると推察される。よって，看護師志望度が高いことやロールモデルとなる看護師がいることは，臨地実習適応に肯定的な影響をもたらしていると考えられる。

２．臨地実習適応と各個人内要因との関連の構造モデル

先に述べた臨地実習適応に影響を及ぼすと考えられる個人内要因を用い，それらの関連性について構造化を試みた。概念変数とした「臨地実習適応」と観測変数である「特性的自己効力感尺度」･「特性自尊感情尺度」･「状態自尊感情尺度」･「社会に対する適応感尺度」･「UPI（逆転）」･「看護学生用ストレス・コーピング尺度」･「看護師志望度」･「目標看護師の有無」の 8 要因との関係についての構造化を検討したところ，Figure 1. に示したモデルの適合度は比較的高い数値を示した。

まず，臨地実習における様々な環境因子との相互作用や実習体験を通し,「特性自尊感情」が状況によって変動する「状態自尊感情」に影響を及ぼし，それが臨地実習適応の影響要因になると考えられる。さらに，看護学生にとって臨地実習の失敗体験は「看護師になる道の困難さ」に直結し，課題特異的な自己効力感の低下に伴う否定的な自己評価が生じやすく，自尊感情への影響を及ぼすと考えられる。このように，特に自尊感情と自己効力感の両者が関連し合いながら，臨地実習適応への影響をもたらしているといえる。

次に,「看護師志望度」と「目標看護師の有無」は相関があるが，臨地実習適応への寄与については「看護師志望度」のほうが大きく,「目標看護師の有無」については臨地実習適応への影響がごくわずかであった。その理由として，本研究の全分析対象者 348 名の中で「目標看護師がいる」と回答した者が 4 割未満であり，全体的に割合が低かったことが挙げられる。この要因として，調査対象者は半数が低学年であり，３年生についても年度初めに回答した者が多く，臨地実習の経験も少ないことから，目指す看護師像があいまいである学生が多かった可能性がある。そのため，臨地実習経験と「目標看護師の有無」との関連性は「看護師志望度」のように明確にはならなかった可能性がある。しかしながら，臨地実習で辛い状況に置かれた場合には，目標看護師の存在や看護師志望度が高いことによって再適応を果たした者が多いことから，臨地実習適応を促進する要因であると考えら

れる。加えて，これらの二つの観測変数を取り入れた方がモデル適合度は高くなることから，「看護師志望度」と「目標看護師の有無」も構造モデルに含めることとした。

また，「目標看護師の有無」や「看護師志望度」と各個人内要因との関連では，「特性的自己効力感」との中程度の相関が認められた。片倉・高橋（2014）によれば，臨地実習で出会う看護師の姿からの代理体験によって，看護者としての自覚を高め，目指したい看護師像を重ねることで自己効力感が高まると考えられている。一方，「目標看護師の有無」および「看護師志望度」は「特性自尊感情」との相関が低かったが，「特性的自己効力感」との間には有意な相関が明らかであることから，単に「目標看護師の有無」と「看護師志望度」の総得点が小さいことの影響ではないと考えられる。James（1892）によれば，自尊感情の公式は「自尊感情＝成功／願望」と表される。これに従えば，自尊感情が高い（低い）ものは目標志向を抑制する（高める）こともあり，自尊感情の高さと目標の高さが相反する場合もあり得る。また，他の影響要因として，自尊感情における自己価値の随伴性との関連も考えられる。自己価値の随伴性とは，「個人が特定の自己領域を価値づけている，もしくは自尊感情の源としている程度」と定義されている（Crocker & Wolfe, 2001；大谷・中谷, 2011）。伊藤他（2013）によって開発された自尊源尺度では，「対人関係」・「個人特長」・「生き方」の３項目が示されており，「生き方」の下位尺度には，将来の目標・成長への努力などが含まれている。また，大谷他（2011）によると失敗場面において自己価値の随伴性が高いほど，状態自尊感情の低下をまねくとされている。つまり，看護師志望度や目標とする看護師の存在は自尊源となり得ると考えられ，これらに価値を置いているか否かによって，臨地実習で上手くいかない出来事に直面した際の自尊感情への影響が左右されると考えられる。そのため，調査対象者の回答傾向に一貫性がみられなかったことによって相関が低くなった可能性がある。

一方，他の個人内要因との相関が非常に弱かったものが「看護学生用ストレス・コーピング尺度」である。看護学生のコーピングスタイルについては，情緒的・回避的コーピングに大差がなく，積極的コーピングが高い者は臨地実習適応が良いという結果であった。これらのことから，問題と対峙するコーピングスタイルが臨地実習適応を促進する個人内要因の一つであるといえる。このように，一部のコーピングスタイルのみに個人差が認められたことから，他の個人内要因との関連性が低かったと考えられる。

最後に，現在の適応状態と臨地実習適応との関連については，過去の臨地実習適応が良好な者ほど調査時点での心理的・社会的適応感の指標として用いた「社会に対する適応感」と「UPI（逆転）」が高くなることが示された。したがって，過去の臨地実習適応がその後の社会的・精神的適応に影響を及ぼす可能性が示唆された。

３．看護学生が求めるソーシャルサポート

本研究の第二の目的として，看護学生が臨地実習に躓いた際に求めるソーシャルサポートを明らかにすることを挙げた。その結果，指導者・教員・家族・実習メンバー・友人によって求める支援内容が異なることが明らかになった。以下，それらの特徴を述べる。

１）周囲の人々に求めるソーシャルサポートの特徴

まず，指導者に関しては，「アドバイス」・「優しい」などの言葉が抽出され，優しく，具体的にわかるよう，解決に導くようなアドバイス・指導を求めていた。臨床指導者は，学生にとってロールモデルとなる存在である。それゆえ，適切な看護を考えられるように教えてくれることを指導者には求めていると考えられる。

次に，教員に対しては，「アドバイス」・「教える」といった言葉が上位であることは指導者と共通していた。その一方で教員に特徴的であるのは，「聞く」・「一緒に」・「話」・「自分」などが抽出されたことである。これは，自分たちの状況や気持ちをよく理解してほしい，思いを聞いてほしい，一緒に考えてほしいなど，臨床指導者よりも学生の気持ちや考えに寄り添ってもらうことを求めていると推察される。

また，家族に対しては，圧倒的に「聞く」・「話」が多かった。この語は教員の結果との共通性がある。その一方で，家族に求めるソーシャルサポートとして特徴的であったことは，「ご飯」・「励ます」・「いつも通り」・「見守る」・「そっとして」などの言葉が抽出されたことである。このことから，家族には，辛い気持ちに耐えながら臨地実習に臨んでいる自分を見守り，心の安らぎや居場所といった情緒的サポートを求めていると考えられる。さらに，学生たちは帰宅後も課題に追われる日々を過ごすため，家族に対して食事などの生活支援を求めているといえる。

実習メンバーに対しては，「聞く」・「話」・「励ます」といった情緒的サポートの言葉だけでなく，「一緒」・「お互い」という支え合いの言葉や，その内容に繋がる言葉として「共有」・「考える」・「協力」・「相談」・「解決」などの言葉が挙げられていることが特徴であった。これらのことから，同じ臨地実習の場で時間を過ごしている実習メンバーに対しては，仲間意識を求めたり，切磋琢磨しながら共に成長したり，一緒に問題解決を図ることを求めていると考えられる。

一方，友人に関しては，家族の分析結果よりも「聞く」・「話」が多く抽出された。友人には特に話を聞いてほしいと思っており，情緒的サポートを求めることが中心で

あった。さらに，「遊ぶ・遊び」も抽出されており，実習メンバーに対しては問題焦点型コーピングに繋がる支援を求めているが，友人に対しては情動焦点型コーピングに繋がる内容が多いといえる。

2）不適応群が求めるソーシャルサポートの特徴

臨地実習で辛い経験を持つ者の中で，それらを乗り越えた再適応群と乗り越えられなかった不適応群の求めるソーシャルサポートには，両群の特徴がみられた。

まず，指導者ついて，再適応群には「考える」という語が上位に抽出されており，自立的な傾向が伺えた。一方，不適応群は「具体的」が上位になっていた。これらのことから，不適応群は再適応群よりも，具体的にはっきりと教えてほしいというニーズを持っている傾向にあると推察され，再適応群よりも周囲のサポートに対して受動的な姿勢があると考えられる。

次に，教員については，不適応群には「分かる」が上位になっていた。これは「分かるように・分からないところを」教えてほしい，「分かって」ほしいといった内容であり，再適応群には認めらなかった。これらのことから，不適応群の場合は，再適応群よりも自分たちに理解を示すことを求めている傾向が伺える。したがって，教員による学習支援においては，臨床指導者が行う以上に心理的なサポートを適切に行うことが重要となる。

また，家族については，不適応群には「励ます」よりも「聞く」・「話」・「見守る」を求めている者が多かった。不適応群は臨地実習の成功体験が少ないと考えられ，今回の調査結果からも自己効力感や自尊感情が低い傾向にある。安定的に自尊感情が低いものは，否定的な出来事への対処や肯定的な出来事への同化などの試みはほとんどないとされている（無藤他, 2004）。「励ます」という行為は，辛い状況に対して向かっていくように促す関りである。しかし, 不適応群が求めている心理的サポートは，ありのままの自分の状況や辛い気持ちを受け止めてもらえることであると考えられる。

実習メンバーについては，不適応群には「メンバー」・「悪口」などが抽出されており，臨地実習のグループ学生との人間関係が良好であることを求めていると考えらえる。この背景として，もともとの対人関係スキルに課題があるために実習メンバーとの良好な関係性を築けないことや，実習に上手く適応できないことによって他の学生と学習進度やモチベーションなどに差が生じ，効果的なグループダイナミクスにならないなど，実習メンバーとの関係性にネガティブな経験を有している可能性がある。

最後に，友人については，再適応群・不適応群共に「聞く」・「話」が多く，全体の傾向と類似していた。

4．臨地実習における適応支援への示唆

龔（2020）らの質的研究によれば，学生が求める人的資源として，身近に支援してくれる・必要としてくれる・頼れる・胸の内を話せる人の存在のほか，学生への気持ちの理解や具体的な指導・助言，指導時の肯定的な関りなどが抽出されており，臨地実習適応における人的資源の重要性が示唆されている。

今回，一度でも臨地実習を経験した者の中で半数の学生が辛い経験を有していた。さらにその中で，3 割以上の学生がそれを乗り越えられなかったと感じており，挫折した体験のままに臨地実習を終了したと考えられる。このような体験は，今後の臨地実習に対する自己効力感を低下させ，さらなる臨地実習不適応を引き起こす要因になり得ると考えられる。臨地実習には様々なリスク状況が待ち受けており，ネガティブな出来事に直面する場面が多いといえる。このように臨地実習において適応状態が低下した際には, ソーシャルサポートが重要となる。

ソーシャルサポートとは，周囲の人々から受ける様々な物理的・心理的援助であり，実際の援助の量よりもそれらの援助を受け止める側の認知的な能力が重要であるとされる（無藤他, 2004）。今回，過去の臨地実習において辛い経験を乗り越えられなかった学生の特徴として，自己効力感・自尊感情・積極的コーピングが低い傾向にあった。ソーシャルサポートにおいても，具体的な指導や共感・承認を求めており，対人関係において受動的な姿勢が伺えた。このような学生たちは，周囲の人的資源を認知したり，他者に相談することへの動機づけを高めたり，実際に相談行動をとって他者からの助言を理解し受容するといった人的資源の活用に課題を持っている可能性がある。平野（2015）は，問題に立ち向かう動機づけを持てずにいる人にとって，自分を否定されずに，肯定してもらい，「聞いてもらう」というステップが必要であると述べている。その過程を経て徐々に「教えてもらう」サポートを求める準備ができ，問題に向き合う動機づけを持つことができるようになると考えられている。こうした，「聞いてもらう」サポートの中で，傷ついた本人を支えることによって，問題に立ち向かう力が育まれると考えられている。また，山田他（2010）による研究では，臨地実習において学生を成長に導く指導者の関わりとして，「意欲を高める言葉と態度」・「思考と実践を高める教授技術」が抽出されている。反して，学生の成長の妨げとなる指導者の関わりは，「学生の自尊心への配慮不足」・「思考と発展を阻害する指導」であり，効果的な指導のためには，学生のレディネスの把握・コミュニケーション能力の向上・教員と指導者間の連携強化が必要であることが示唆されている。

以上のことから，臨地実習で直面する困難に対して積極的に行動できない学生の指導に当たっては，そのこと

を指摘して行動を促すよりも，まずは教員・指導者から歩み寄り，学生に理解を示し，心理的サポートを行うことが必要である。そのためには，教員・指導者自身のソーシャル・スキルが重要となるであろう。このように学生の心理面を支えながら，具体的な行動変容への助言と学習支援を行うことが臨地実習不適応を予防するうえで重要である。

5．本研究の限界と課題

今回の調査は過去の臨地実習の適応と個人内要因との関連を検討したため，それらの因果関係を検証することに限界がある。また，今回の質問紙調査では，対象者ひとり一人の他者評価を行うことが困難であったため，主観的適応感のみに焦点を当てた。しかし，適応状態の評価には，精神的・社会的側面および主観的・客観的側面が必要であることから，臨地実習適応の客観的な指標を用いた評価が必要である。今後は，臨地実習の前・中・後による縦断研究を行うことで，臨地実習適応と個人内要因との因果関係やソーシャルサポートの効果を明らかにできると考える。

結　　論

1．臨地実習適応に影響を及ぼす個人内要因

過去の臨地実習における主観的な適応状態の評価が良い者のほうが「特性的自己効力感尺度」・「特性自尊感情尺度」・「状態自尊感情尺度」・「社会に対する適応感尺度」・「看護学生用ストレス・コーピング尺度」の積極的コーピングの得点および看護師志望度が高く，「UPI」の得点が低く，目標とする看護師がいる者が多い傾向にあった。

2．臨地実習適応と個人内要因との関連の構造化

共分散構造分析の結果より，概念変数とした臨地実習適応と観測変数とした各個人内要因との構造モデルの適合度は良好であり，自尊感情・自己効力感・積極的コーピング・目標看護師・看護師志望度が臨地実習適応を促進すると考えられた。その中で，特性自尊感情は状態自尊感情を介して臨地実習適応に影響を及ぼしていた。さらに，過去の臨地実習の適応状態が，その後の心理的・社会的適応に影響を及ぼすことが示唆された。

3．学生が求めるソーシャルサポート

学生が求めるソーシャルサポートとして，指導者に対しては優しく具体的なアドバイスを，教員に対しては学生に対する理解や共感を求めていると推察された。これらのことから，臨地実習適応の促進を図るうえで情緒的サポートの重要性が示唆された。

利 益 相 反

本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

引用・参考文献

阿部　美帆・今野　裕之（2007）．状態自尊感情尺度の開発　パーソナリティ研究，*16*(1)，36-46.

新たな医療の在り方を踏まえた医師・看護師等の働き方ビジョン検討会（2017）．報告書　厚生労働省　https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-isei_384675.html（2021 年 9 月 23 日）

Bandura, A.（1977a）. Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, *84*, 191-215.

Bandura, A.（1977b）. *Social Learning Theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
（原野　広太郎（監訳）（1979）．社会的学習理論—人間理解と教育の基礎—　金子書房）

Bandura, A.（ed.）（1995）. *Self-Efficacy in Changing Societies*. Cambridge University Press.
（本明　寛・野口　京子（監訳）（1997）．激動社会の中の自己効力　金子書房）

榎本　博明（1998）.「自己」の心理学 ── 自分探しへの誘い ── サイエンス社

遠藤　辰雄・井上　祥治・蘭　千尋編（1992）．セルフエスティームの心理学　ナカニシヤ出版

江本　リナ（2000）．自己効力感の概念分析　日本看護科学学会，*20*(2)，39-45.

藤澤　美穂・畠山　秀樹・氏家　真梨子・高橋　智幸・松浦　誠（2017）．医療系大学の臨床実習における学生のストレス　岩手医科大学教養教育研究年報，*52*，55-52.

藤澤　美穂・氏家　真梨子・畠山　秀樹・高橋　智幸・松浦　誠（2018）．看護系学部の臨床実習における学生のストレス　岩手医科大学教養教育研究年報，*53*，39-50.

濱松　恵子・伊東　美佐江・片山　由加里（2018）．実践的な臨地実習おける看護学生の感情労働の構成概念の検討と尺度化　日本看護研究学会雑誌，*41*(2)，137-146.

速水　敏彦（1998）．自己形成の心理 ── 自律的動機づけ ──　金子書房

平野　真理（2015）．レジリエンスは身につけられるか ── 個人差に応じた心のサポートのために ──　東京大学出版会

出野　美那子（2007）．子どもの心理的不適応に関する文献的研究 ── 1．不適応の状態像について ──　生老病死の行動科学，*12*，23-33.

稲山　明美・伊東　美佐江・松本　啓子・山本　加奈子（2018）．看護学生の効果的な臨地実習に向けた自己効力感に関する検討　川崎医療福祉学会誌，*28*(1)，*37*-46.

James. W（1892）. Phychology, Briefer course.
（今田寛訳（1992）．心理学（上）　岩波書店）

James. W（1892）. Phychology, Briefer course.
（今田寛訳（1992）．心理学（下）　岩波書店）

鎌原　雅彦（1995）．第 4 章　随伴性認知　宮本　美沙子・奈須正裕（編）　達成動機の理論と展開 ── 続・達成動機の心理学 ──（pp. 89-114）　金子書房

金子　さゆり・樅野香苗（2015）．基礎看護学実習にける看護学生のストレス因子構造と対処行動　名古屋市立大学看護学部紀要，*14*，51-59.

唐澤　かおり（1995）．達成動機づけにおける感情の役割 ── Weiner の帰属理論の観点からの分析 ──　心理学評論，*38*，

281-300.
加島　亜由美・樋口　マキエ（2005）．臨地実習における看護学生のストレッサーとその対処法　九州看護福祉大学紀要，*7*(1)，5-13.
片倉裕子・高橋弘子（2014）．看護学生が臨地実習で自己効力感を高める要因 ── 4 年時の実習を終了した学生へのインタビューの質的記述的研究 ──　母性衛生，*54*(4)，486-494.
看護学教育の在り方に関する検討（2012）．大学における看護実践能力の育成の充実に向けて　報告書　文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm（2021 年 9 月 23 日）
北村　譲崇（2011）．青年期における自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関連　人間・環境学，*20*，1-11.
龔　恵芳（2020）．看護学生の実習適応感に影響する要因の検討　応用心理学研究，*46*(1)，11-21.
Lazarus, R. S., & Folkman, S.（1984）. *Stress, Appraisal, and Coping*. New York: Springer Publishing Company.
（本明　寛・春木　豊・織田　正美（監訳）（1991）．ストレスの心理学―認知的評価と対処の研究―　実務教育出版）
宮本　美沙子・奈須　正裕（1995）．達成動機の理論と展開―続・達成動機の心理学―　金子書房
溝口　満子・大石　杉乃・竹内　佐智恵（1997）．看護大学生の実習時における困難な問題とコーピング　東海大学健康科学部紀要，*3*，21-30.
毛利　貴子・眞鍋　えみ子（2008）．臨地実習中の看護学生におけるストレスコーピングと臨地実習自己効力感との関連　京都府立医科大学看護学科紀要，*17*，65-70.
無藤　隆・森　敏昭・遠藤　由美・遠藤　由美・玉瀬　耕治（2004）．心理学　有斐閣
中間　玲子編（2016）．自尊感情の心理学 ── 理解を深める「取扱説明書」──　金子書房
中島　美香・粕谷　恵美子（2018）．慢性期看護学実習における看護学生のストレス調査　医療保健学研究，*9*，33-41.
中本　明世・伊藤　朗子・山本　純子・松田　藤子・門　千歳・横溝　志乃（2015）．臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較 ── 基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して ──　千里金蘭大学紀要，*12*，123-134.
成田　健一・下仲　順子・中里　克治・河合　千恵子・佐藤　眞一・長田　由紀子（1995）．特性的自己効力感尺度の検討 ── 生涯発達的利用の可能性を探る ──　教育心理学研究，*43*(3)，306-314.
西田　薫・野村　亮太・丸野　俊一（2012）．自己効力感に関する研究と今後の展望 ── 展望的自己効力感の提唱 ──　九州大学心理学研究，*143*，1-9.
小笠原　陽子（2017）．文献による臨地実習で看護学生が感じる困難　八戸学院大学短期大学部研究紀要，*45*，27-37.
坂野　雄二・東條　光彦（1986）．一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み　行動療法研究，*12*(1)，73-82.
坂野　雄二（1989）．一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討　早稲田大学人間科学研究，*2*(1)，91-98.
坂野　雄二・前田　基成編著（2002）．セルフエフィカシーの臨床心理学　北大路書房
Sherer, M., & Maddux, J. E.（1982）. The self-efficacy: Construction and validation. *Psychological Reports*, *51*, 663-671.
桜井　茂男（1997）．学習意欲の心理学 ── 自ら学ぶ子どもを育てる ──　誠信書房
柴田　和恵・高橋　ゆかり・鹿村　眞理子（2006a）．看護学生の実習適応感に関する研究（第 2 報）── 実習適応感と関連要因の学年比較 ──　群馬パース大学紀要，*2*，47-57.
柴田　和恵・高橋　ゆかり・鹿村眞理子（2006b）．看護学生の実習適応感に関する研究（第 4 報）── 愛着パターン別実習適応感の特徴 ──　群馬パース大学紀要，*2*，67-78.
高橋　ゆかり・柴田　和恵・鹿村　眞理子（2006a）．看護学生の実習適応感に関する研究（第 1 報）── 尺度作成の試みと信頼性・妥当性の検討 ──　群馬パース大学紀要，*2*，37-46.
高橋　ゆかり・柴田　和恵・鹿村　眞理子（2006b）．看護学生の実習適応感に関する研究（第 3 報）── 実習適応感に影響を与える要因の分析 ──　群馬パース大学紀要，*2*，59-66.
竹内　登美子（1996）．看護学生用ストレス・コーピング尺度の作成（その 1 ）── 因子分析による内的信頼性・妥当性の検討 ── 日本看護研究学会雑誌，*19*(2)，25-34.
近村　千穂・石崎　文子・小山　矩・青井　聡美・飯田　忠行・小林　敏生（2007）．看護臨床実習におけるストレス状況と性格との関連　県立広島大学保健福祉学部誌，*7*(1)，187-196.
土屋　八千代（2001）．看護大学生のストレス構造とマネジメント ── 行動変容をもたらす体験学習 ──　日本大学大学院総合社会情報研究科紀要，*2*，241-251.
Weiner, B.（1985）. *Human motivation*. New York: Springer-Verlag.
（林　保・宮本　美沙子（監訳）（1989）．ヒューマン・モチベーション ── 動機づけの心理学 ──　金子書房）
山田　知子・堀井　直子・近藤　暁子・渋谷　菜穂子・大橋　幸美・上田　ゆみこ…丸山　尚子（2010）．看護学生の認知する臨地実習での効果的・非効果的な指導者の関わり　生命健康科学研究所紀要，*7*，13-23.
山本　真理子・松井　豊・山成　由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，*30*(1)．64-68.